



広島高師青春の歌

昭和56年 8月2日

ポートピア'81 寮歌青春コンサート

神戸市 国際交流会館



尚志会兵庫県支部

編集 8・2 実行委員会代表世話人 武田清市
資料提供 坂吉次郎・半田一雄・岩村 正

山男の歌 (昭和十五年山岳部の歌)

一、同じ山への 憧れを
胸に抱きて 行く道は
教への道ぞ 山男
広島高師の 山男

作詞 神尾 明正
作曲 武山 信治
制定編曲 芦立 寛

三、広島山 低くとも
夏は故郷の山が待つ
岩をよづれば 山男
無我を悟るは この時ぞ

二、人みな花に 酔ふときも
残雪恋ひて 山に入り
涙を流す 山男
雪解の水に 春を知る

五、町の乙女ら 想ひつつ
尾根の処女雪 け立てては
シユテンボーゲン 山男
浩然の気は 言ひ難し

四、深山紅葉に 片時雨
テント濡らして 暮れてゆく
心なき身の 山男
もののはれを 知る頃ぞ

六、同じ教への 道を行き
まぶたに浮かぶ 山の道
道は一つぞ 山男
広島高師の 山男
広島高師の 山男

芦立 寛



この歌は山岳部の歌であるが、戦中、戦後に在学した学生達が好んで唱ったものである。広島高師校友会山岳部の記録に「新作曲成。昭和15年8月、神尾兄作詩・武山氏作曲、ハ短調なるものを、ト調に直す。少し淋しくはあるけれども、落付いた曲である。ゆっくりうたって欲しい芦立寛」とある。当時山岳部のキャップであった芦立寛（文科第一部4年在学）氏が中心となり、高師地理教室助手であった神尾明正氏と共に作詞、それを芦立氏の姉婿で当時栃木師範学校の音楽の先生であった武山信治氏に作曲を依頼、その曲を記録のようにト調に編曲したものとされている。

芦立氏の事については宮城県出身、昭和12年入学、昭和16年3月卒業、引つづき文理科大学心理学科へ進学、昭和19年卒業後、山形師範学校教諭となり、昭和22年郷里の宮城師範学校に転任、学制改革により東北大学教育学部講師、昭和27年、県立農業短期大学教授、学生部長を歴任されたが、昭和48年故人となられたという。学生時代は豪放磊落、常に温顔をもって人に接した。世話見のよい人柄で先輩、部員の面倒をよく見、絶好の山のリーダーであったという。

この歌は5年程前「坊ヶ峯讃歌」という名称で、曲はそのままで歌詞を変え、人気歌手芹洋子が唱い、ヒットメロディーとして電波に乗り、NHKも「みんなの歌」で取上げるといふブームを呼んだ。

太平洋戦争で、多数の同窓を失い、又広島原爆で学校は灰燼となり、幾多の研究者が犠牲になるといふ不幸の中で、この山男の歌が静かに唱われ、広島高師の伝統をつたえてくれたことは、忘れてはならないことである。



大山スキー訓練 (昭15・1)

学生歌 (大正十五年)

瀬戸の島浦

作詞 満井 隆行
作曲 弘田竜太郎

満井 隆行



一、瀬戸の島浦 春霞

霞に明くる 東雲の
風さわやかに 吹くところ
水清き郷 広陵に

我が友楫を 執りてより
乾坤めぐる 幾歳ぞ

三、花楼台に 乱れては

健児の胸を 搏つを見よ
北辰天にさゆらげば

ここに黙示の 光あり
翠袖の香に 酔ひ痴るる
世をば教へん 人や誰

二、時潮空しく 流れては

陵上謡ふ 笛の音に
酔乱の世の 夢醒めず

道を伝ふる 旗の色
沈倫の影に 消えゆきて
世は寂莫の 世紀末

四、汐満ち来れば 銀燭の

影はたゆたふ 岸の波
我白楊の 樹に凭りて

高き理想を 思ふとき
燃えてはめぐる 熱烈の
血潮は胸に たぎるかな

五、聴け歓宴の 花枕

古き美酒 香もあせて
新しき世の 狂瀾は

地平の外に ゆらぐなり
いざや歌はん 我が友よ
その寂莫を 破るべく

大正15年に作られた学生歌は現在でも広島大学で唱われているようである。作詞者は当時文科3部(歴史専攻)3年に在学していた満井隆行氏(学生時代の写真)である。当時学友会が募集した学生歌に応募、第1席で入選したものとされている。満井氏については今は故人になっているが、同級生の坂吉次郎氏(西宮市在住)のお話によれば、広島修道中学出身で、純情多感の好青年であった。和服と袴姿でよく登校し、飄々とした容姿の内に燃える熱情をた、えた男であったという。昭和4年より文科大学に進み、東洋史を専攻、卒業後は石川県小松高等女学校に奉職、その後、茨城県水戸師範学校に転任され、戦後は茨城大学教育学部の教授となり、定年退官後間もなく、今から10年程前に故人になられたということである。この満井氏の詞に当時の有名作曲家弘田竜太郎氏が曲をつけられたものである。大正の末期、華やかな大正デモクラシーの時代もようやくかけりが見られるようになり、昭和初期の不況の波が、ひたひたと国民生活の中におしよせつつある時代の青年教師の思いを述べたものと言えよう。左掲の写真は、宮島巡検の際、巖島神社の社頭での同級生(文科3部)全員の写真である。学生歌“瀬戸の島浦”を始めて高唱した面々の記念すべきものといえよう。



宮島巡検(大正15・11)

広島文理大高等師範

学園歌 (昭和十一年)

作詞 山田 光遠
作曲 山本 寿

一、朝日輝く 水都の空に

競ひそそれる 四つの学舎
若き生命 我等集ひ

栄ある歴史 ここに仰げば
教化の 木鐸高らかに
貴き使命 響きぞわたる

二、北斗 微笑む 鯉城のほとり

こぞり並立つ 四つの学舎
若き精神 我等集ひ

不断の思索 ここにたぎれば
真理の聖火 明からかに
地上の文化 輝きわたる

三、瀬戸の内海 波打つところ

陸み寄り立つ 四つの学舎
若き力 我等集ひ

遙き理想 ここに謳へば
尚志の大道 遠白く
希望の行手 ひらけぞわたる

広島高等師範学校

淳風寮々歌 (昭和十六年)

一、朝は緑に風薫り

夕紫に雲にほふ
山陽のつち瀬戸の海

清き望みにつどいたる
健児のやどり影映えて
その名もゆかし淳風寮

二、若き心と若き胸

熱き血潮にあいよりに
磨け鍛へよ皇国の

力とたのみ選られたる
その喜びを身にふかく
使命は重し淳風寮

三、君は川辺に水をくみ

我は林に木をとりぬ
古人の心身にしめて

新しき世のかちどきを
東亜の空にあげんかな
理想は高し淳風寮

明治35年、山紫水明の地広島に創立した広島高等師範学校は、昭和4年広島文理科大学を併置、昭和27年新制大学移行のため閉校となるまで丁度50年間の歴史を閲している。この半世紀に亘る求道の中に幾多の青春の歌が唱われ、教の道に志す有意の青年を育てて来たのである。ここに掲げる4編は下の写真のようないろいろの学生生活の中に、好んで唱われた秀作といえよう。

100杆強歩正門より出発(昭14・5)



宮島遠漕(昭13・11)